

「では、改めまして。……此の度に於きましては、並々ならぬお心遣いの上、私のような若輩者を招いて頂き。御礼の申し上げようも御座いません」

示された座布団の脇に正座し、深々と頭を下げる書生の姿を見て任侠は苦笑した。ちらりと脇へ目をやれば、細い背広姿の伊達男が上着と帽子を脱ぎながらさつさと自分へと割り振られた席に着き、胡坐をかいてそっぽを向いている。

本来であれば、先程のような口上は保護者たる伊達男が口にすべきことであるのに、当の本人は素知らぬ顔で書生の脇に控える黒猫を手招きしている。招かれた黒猫が呆れた目を向けたように見えたのは、目の錯覚だろうか。

「……葛葉ア、頭上げてくれ。お前にはわしの方も世話になつとんや。其れに比べたらあれくらい面倒のうちにも入らんし」

「そうそう、だから全然気にすることなんてないんだぜライドウ」

追いかけるように言葉を付け加えてきた伊達男の顔を伸ばした腕でへちりと叩けば、油断していた伊達男のくるくる頭が後方へと仰け反った。

「つてえ、何すんだよ」

赤くなつた額をさすりながら睨みつけてくる伊達男に冷たい一瞥をくれてやりながら、お前が言つなと言葉を回けた。

「そもそも、誰が一番迷惑かけたと思とんねや」

伊達男は無言で顔を背けた。どつせ拗ねた顔で不貞腐れているのだらう。

任侠の言葉に顔を上げかけていた書生はといえは、突如始まった一幕に目を白黒させていたが、彼の位置からは伊達男の表情をつぶさに見て取れるのか。案ずる光を目の中に浮かべながら、それでも目の前に居る任侠と伊達男の会話に口を挟むべきか否かで迷っている様子だった。またそんな書生の姿も当然分かつているだろうに、譲る気配のない伊達男の姿に仕様の無い奴やとは思うが、それでも此の矜持の高い男にとっては、自らの部下であり情人でもある書生の前だ。自分が悪いと分かっている。此の場で頭を下げるという行為は受け入れ難いものがあるのだろう。

しかし何時までもこのような状態では、折角用意した酒も料理もまずいものとなってしまう。諸々の追求は書生の居ない折にでもすれば良いかと考え直し、何時まで経っても大人になりきれない伊達男の代わりに、此処は一つ自分が退いてやらねばなるまいと思ひ、溜息一つで許す言葉を投げかけようとした其の時。伊達男は頑なに引き結んでいた薄い唇を少うしだけ開き。

「悪かつたよ……」

掠れて消えそうな声ではあったが、確かに侘びの一言を呟き。任侠は僅かに眉宇を上げ、笑った。

「……葛葉ア、エエから早よ座れ」

自らの情人を注視していた目を任侠の方へと向け。迷いながらも二人の間に流れる緊張感が解けたことを感じたのか、再び気がかりそうに伊達男へと視線を送りながら書生は残る一つの席に腰を下ろした。黒猫は途中まで其の傍に従っていたが、書生が何事を呟いた後、心得たとばかりにひらりと身を翻し伊達男の膝の上へと駆け寄る。顔を背けたまま戻しあぐねていたのである。伊達男は突然自らの膝の上に現れたぬくもりに驚き、目を向けることで図らずも任侠の方にも顔を戻すこととなり。

気まずそうな顔つぎのまま黒猫の喉元の毛を撫でた。

一連の慣れた動作に、こいつ猫にまで面倒見てもるとんのかと噴出しそうになるが、今またそれを口に出しては元の木阿弥になってしまふことが分かっていたので表に出さず。正座を崩そうともしない書生へ楽にしると声をかけるに止めた。

「いえ、慣れていきますので」

俺はこれだと微笑を浮かべた書生は以前にも増して年齢不相応の貴祿を醸し出しており。此の伊達男には勿体無い程の男振りだ。全くこれで未成年だというのだから未熟らしい。

にやりと笑いかけながらさあ先ずは一献と銚子を手に書生へ盃を持つよう促すと、書生が其れに応えるより早くに伊達男が猫を撫でていた手を止め、慌てて口を挟んだ。

「ばつ、佐竹おま、何やってんだよ、」

「何て、酒注ぎとしてんのが分からんか」

「分かってるよ、そんなことは見ればさあ。だけどこいつは未成年なんだぞ、保護者である俺の前で平然とアルコホルをすすめる奴があるか、」

お前誰やねん、という言葉を呑み込む。

「お前かてどうせこいつの歳には呑んどつたんやろ」

「煩い。其れと此れとは話が別だ」

当の本人を置いてけぼりで始まった遣り取りに、しかし先程の様な緊張感が存在していないことで案する必要は無いと感じたのか。書生は座して一動もせず、流れに身を任せるつもりのようにだった。

「別に構わんやろが。大して珍しいことでもないし」

「駄目！まだ駄目です」

子供が駄々を捏ねとんとちゃうんやぞ、この三十路男が。

「思い出したように保護者ぶりよってからに」

「思い出したよ！って何だ、俺は何時たつて立派な保護者だぞ」

「……て本人はゆつとるけどホンマのところはどうなんや、葛葉」

むきになつて言い募る伊達男を片手で制しながら、ひっそりと影のように佇む書生に向かってにやにやと笑いながら水を向けた。すると彼は長い睫に縁取られた切れ長の目をぱちぱちと瞬き、僅かに首を傾げて沈思黙考した後、徐に口を開いた。

「……世間一般で謂う所の保護者とは少々異なる在り方ではあったのですが、確かに鳴海は俺の保護者として在ってくれました」

「ほお、」

連れである書生の証言にそれみたことか、と胸を張る伊達男を他所に、意味ありげな何かを察して続きを促す。

『』「異なる』て何や、」

「そつです、ね、例えば、」

矢鱈と肩を抱いてきたり。

突然後ろから抱き着いてきたり。

「後は」

指や手の甲で俺の頬を撫でてくることなんて日常茶飯事でしたし……。

こちらが油断した隙に引き寄せられ、頬に口付けをしてきたりっていうのも良くありましたね。

「後はまあ、そついった類のことを諸々」

その癖 ある日を境にそついった事がばたりと止みまして。

「自分は何か嫌われるようなことをしでかしてしまったのかと、少々気に病んで、眠れぬ夜を過ごしたことも数度、ございました」

「そらまたエライ身勝手な奴ぢやなあ」

指折り数えられた悪行に、立派な保護者が聞いて呆れるわとじろりと目線を向けるも当の本人は分が悪いことを早々に悟ったが。素知らぬ顔で猫と戯れていた。

「けれど、時折社会勉強、と称して色んなところへ連れて行ってくださいました」

自盗に注いだ酒を舐めながら話を促す。

銀座の資生堂。三越、大丸、松屋、伊勢丹といったデパート。洋食屋にカフェー。支那料理に蕎麦屋、博物館に展覧会、浅草の活動写真館。

「恥ずかしながら俺は田舎者ですから。前もって様々なことを教えて頂いたお陰で、同級の連中と話をする時にも恥をかかずに済みました」

其の証言からすると、犯罪紛いの仕打ちだけでなく、ちゃんと保護者として其れなりに可愛がってやっていたらしい。書生を引き取ることになったと云って不貞腐れていた男に、一体どんな心境の変

化があつたのか。じつくり聞いてやりたい気もするが、其れは書生の居ない時にでも尋ねてやればいかと、心に留め置くだけにした。

「……ただ」

書生の口からこぼれ始めた言葉に不穏な気配を感じ取り、大人たち（と黒猫）が揃って目を向けるが、書生は感情を窺わせない顔つきで続きを口にした。

「被保護対象であつた俺を手紙一つ残しただけで探偵社に置き去りにして、単身死地に乗り込むような方が立派であるかどうかについては」

甚だ疑問ではありませんが。

「……嗚呼そら確かに」

「……お前未だ根に持つてんのか」

自ら用意した番茶を啜る書生の姿を凝視し、成る程と納得した任侠を他所に、ぐつの音も出ない伊達男はへにやりと眉尻を下げ力なく呟き、書生に向かって恐らく二人の間では恒例となっているのであろう弁解を始めた。

「なあーもうほんつと俺が悪かつたつて言つてるじゃねエかライドウ、いい加減許してくれよ」

「さて、どうしたものでしょうね」

冗談に見せかけて実は半分ばかり本気なのだろう、そっぽを向いてつれない顔を見せる書生の姿からはそれでも隠し切れない情が滲み出ており、また其れを見逃す筈のない伊達男はしめたとばかりに擦り寄つてご機嫌伺いに走ろうとしていた。その様子を間近で見ていた任侠は、まるで野良か何かを

相手にするように片手でしっしとあしらう。

目の前でいちやつかれてはうまい酒も何もあつたものじゃない。

「エエからぐちやぐちや言うたらんと、お前は其処で猫こでも戯れとけ」

「猫こでもとは何だ猫こでもとは」

書生の肩にかけようとしていた片手を下ろし、むっとした顔つきで文句をつけた伊達男の焦点のずれた批判に力が抜けかけた。

「ツツこむ所は其処か。……なんでもエエわ、今日は晴抜いで見逃したれや」

此処に至つて納得はいかずとも、らしくないとしか表し様のない自らの無粋さ加減に漸く気付いたか。伊達男はしぶしぶ引き下がり、

「こいつにおかしなこと吹き込んだら承知しねエからな」

「わかつたわかつた」

ちえー何だよ仲間外れにしちゃつてさア。ゴウトは俺の味方だよなアイツらはほつといて俺たちは俺たちで一緒に飲もう。

態とらしくいじけながら席へと戻つた先で迷惑そうな黒猫を膝の上に抱き抱え、卓子の空いた場所へ新しい小皿を置いた。一番の年長者である黒猫は、一番の貧乏籤を引かされた気分にならながらも、止むを得ず拗ねた伊達男の相方を務めてやることにした。無論ただで済ませる気は毛頭ない。これはと思つ着を著でつまんだ折に甘い声で擦り寄つてやれば、この猫莫迦はほいほいと差し出してくるであらう。その予想が恐らく外れる訳がないことを、ぐつたらな筈の伊達男がいそいそと黒猫のために

用意始めた、深めの小皿が証明していた。伊達男のそんな仕草を目にした書生の、怒りと嫉妬の混じったぴりりとした視線を背に感じるが、露ほど痛みを感じることもなく伊達男の触れるがままに身を任せた。黒猫にとっては何の疚しさもない行為であるし、普段何かと面倒を看てやっている身としては受けて当然のもてなしだった。

師弟の間で無言で繰り広げられるささやかな遣り取りなど気付きようもない任侠が促すがまま、書生は改めて盃を手に取り、酒を受ける。注がれた其れを無表情のままくいつと傾け、何事もなかったかのように見返してくる書生の姿に任侠はしたりと笑い。初めて口にしたとは到底思えない様子に、黒猫の指示通り刺身を小皿に乗せていた伊達男は衝撃を隠しきれないようだった。

「ラ、ライドウ……、お前、呑めるの、」

「何けつたいな声出しとんねん、気色の悪い。見たら分かるやろ。こいつ、下手したらお前よ

り強いんちゃうか、」

「そ、そんな莫迦な……」

黒猫を片腕でぎゅっと抱き締め、いかにも情けない声で咳く伊達男の姿に、書生は帽子の鏝をくいと押さえ、黒猫と困ったような視線を交わした。両者の姿ににやにやと笑いながら、もう一献と書生を促し銚子を傾けながら任侠は機嫌よく口を開いた。

「まあ身勝手な阿呆はほつとけ。……葛葉ア、お前なかなか呑るクチャの、」

「いえ、そんなことは」

「何や、あいつの身勝手な思い入れなんぞ気にかけたることないんやで、」

「はあ、」

「遠慮せんとその辺のモンも好きなように食べよ。……何処で酒覺えたんや、」

話を向けられ、書生は何処まで話して良いものかと少々迷ったが、差し障りのない範囲でなら構わない、と黒猫に伝えられた後軽く頷いて其の口を開いた。

「故郷では、男であれば十四、五の歳から晴の日には必ずと言って良い程、酒が振舞われました」

「昔で言つところの元服の年やな。普段は、」

「流石にそれは、酒は、古来より溺れ易きものですので、」

そう答えた後、書生の少年は上品に箸を操り、餡かけ豆腐を一欠口へと運んだ。

「鳴海、」

完全に拗ねて視線を合わせてくれない伊達男に、書生は困つたように声をかける。

「あの、……」

「何だよ、ライドウの裏切り者、酒が呑めるなんて聞いてないぞ、この不良書生が、」

「と、仰せになられましても……」

弱り果て、助けを求めて近くに居る黒猫へ視線を投げかけるも素知らぬ振りで見送られた。

この裏切り者。

部外者を装い続ける黒猫に舌打ちしてやりたい心持を抑えながら、おすおすと口を開く。

「その、帝都では未成年に対する飲酒禁止令が出て、疾つになると聞き及んでいたものですから、」

「……何時までそんな面しとんねん。別に珍しくもないやろが、」

未だ愚痴愚痴と口中で呟き続ける伊達男に呆れ返る。

「お前なあ……何処の誰や、十七、八で十二階下の銘酒屋街練り歩いとつたんは」

自身はどつだつたのか思い出してみると、伊達男の過去の悪行のひとつばかりを指摘してやれば、当時のことを全く存せぬ書生は首を傾げ、伊達男は伏せていた顔をがば、と音が立つほどの勢いで上げ、任侠を制止するかのようには手を上げた。

「ちよっ、」

「ええとオ、何やつたかいなあ」

土官はそら敵しかつたけど、うまいことやつて浅草まで出て来てしもたらこつちのもの。

迷宮みたいなつくりやつたが素人やあるまいし、案内なんぞつけんでも大抵の道は把握できとつた。専らぞめきはつきりやつたけど、それなりにコツつてモンがあつてエ。

「ある妓と窓越しでも話始めたら、客がつくまで其処を動かんこと、」

そんで以つてお得意の話術で、営業妨害やいうこと妓が忘れてまづくらい話し込む。以上二点のことを心がけるだけで、別段賢わんでも何度か通う内に親しゅうなれて。

「巷では聞けんような珍しい、色んな話が訊き出せることもあつたんやでエ言つて、赤ら顔でエラい上機嫌に話してくれたのオ」

ばくばくと口を動かしながら身振り手振りで止めると示す伊達男を無視して指折り数えながら言い終えてやれば、嗚呼畜生言いやがつたと半面を片手で覆い、書生の視線から逃れるように顔を背けた伊達男は、だがこれだけはいつた風体で口を開いた。

「……でも俺は買つたことなんてただの一度も無かつたんだからな」

「そやな。確かにそう言つとつたし、お前はそんな間抜けやない。そんなモン買つくらいなら金払うつてちゃんとした妓抱きに行くのを選んだる男やとわしも思つわ」

直ぐ様主張を認めてやれば、少々安堵したのか。伊達男ははあと溜息をつきながら、話の間に平らげてしまつていた黒猫に再度刺身を取り分け始めた。一方、立て続けに話に出てきた言葉の数々は、未だ若々しい大正生まれの書生にはとんと判別のつかぬものばかりであつたらしく、大人たちの会話が途切れたのを見計らつて尋ねてきた。

「ぞめきとは何です」

「ぞめきゆつんは、素うで見る（素見）て書いてな。妓抱かんとただ冷やかすだけの連中のことや」
ついでとはかりに任侠はたらたらと当時の十二階下の風俗について講釈を垂れることにした。何より逐一尋ねられるより其の方が手取り早い。

「大正五年と七年にお国が総力挙げて大々的に取り締まるまで、浅草の十二階界隈にはどでかい銘酒屋街があつたんや」

銘酒屋街うても酒なんて置いとらへん。置いてあるンほど派手な洋装と脂粉にまみれた妓ばかりでな。お飾りの酒瓶一つ置いてない処も珍しゅうは無かつた。

「深川の遊郭に居る妓は、まあ歌も踊りもできるし格式も矜持も、情もあるんやけど。所詮は身売りにされた田舎娘ばかりでな」

其れに比べたら銘酒屋街の妓は、金預けて奥の襖開けたら、話もせんうちに敷きっぱなしのせんべい

布団に横になつて大股開いてはいどつぞつてなモンで、ホンマ情緒もへつたくれもなかつたが。出身が多種多様やつたんや。

「其れこそお決まりに、男に騙され沈んだ妓も居れば、」

「素行の悪さの果てに、其処へ流れ着いた女学生崩れも居たし、」

黒猫の背を撫でながら自盆に酒を注ぐ伊達男が口を挟んできた。観念したのか、面倒見のいい保護者の顔が漸く剥がれてきたようぞ、よしよしと思ひながら後を受ける。

「他にも看護婦しとつたのや電話交換手やつたのも居つた、」

「教員上がりの妓も少なくて無かつたな、下手すると現職のまま日銭稼ぎ、つても居たね……」

花街の妓つてのは情があるのは良いんだが、實際字を修めちゃアいねエから。文学や哲学、詩の話なんかしても一向に通じなかつたけど、彼処の妓たちには通じたのさ、」

「まアそついうこつちや、」

お世辞にもお上品な場所たア言えなかつたけど、彼処じゃタタキヤツツコミつてのは、そつそつ無かつたよな。

懐かしそつに目を細めながら、はくはくとつまそつに刺身に食らいついてゐる黒猫の深皿に酒を注ぎ入れつゝ伊達男は呟いた。

「そら当たり前や、」

彼処には新門辰五郎一家ゆう看板持ちが居つて、確り仕切つとつたからなあ。

「其れが今や……」

「下手にお国が手出したモンだから」

「……新門は退陣してもうて。ゴロツキだのチンピラだの、しょうもない連中が偉そうな顔してのさばるようになってしまった」

「全く、厭だね。工潔癖なお役人つてのは、裏のことなんて何にも分かつちやいね。エンだもの」

伊達男によつて締め括られた昔語りの後、暫しの沈黙が満ち。箸の動く音のみが響いた。

酔いの欠片も見せず、ただ当時の風俗話に聞き入りつつ任侠や伊達男へ向かつて酒を注ぎ入れている書生は、しばし沈黙した後成る程と呟き。

「しかし何故お買い求めになられなかつたのですか」

平然と自らの情人たる伊達男へ向かつて問いかけたときには、任侠はたまらず笑つてしまった。にやにやと笑いながらどう答えるか眺めていると、此の話題に関しては既に諦めの境地に入っているのか。伊達男は愚問だとばかりに一笑に附した後ゆるりと口を開いた。

「花街の妓はそれなりに管理されてるが、彼処は違つた。色んなものが流行るがままに放置されてたんだ。折角努力して大學に入つたり、いい役職に就けたりしたのに、五十銭銀貨一枚で事足りる、巧くやりやア釣りが来るつてんで喜び勇んで通い詰めた拳句、妓から釣りだけじゃなく土産までもらつて、一生を棒に振つた野郎なんざ珍しくも無かつたからな」

金の無い、自分で妓を口説き落とせないよつた連中には、彼処は正に救いの街だつたんだろつけど。

「俺は、そんな莫迦の仲間入りをするのは死んでも御免だつた。だから、彼処は話をするだけの場所と決めたのだ」

實際、彼処の妓たちと話をするのは純粹に楽しかったし、男と女つてだけで、これだけ感性が違うモンかと勉強にもなつたしな。

「彼女らをただ見下して莫迦にする連中も居たが、俺は彼女らのことが好きだったよ」

「なんせ此の俺のしてることだつて見ようによっちゃア、彼女らと何ら変わりはないと言えなくもなかつたしな……謂わば同類つてやつ。」

軍属であつた当時の己をそう評して自嘲した伊達男が盃を傾ける様を、書生は静かな眼差しで見遣り、左様でしたか、と目を伏せた。そして流石に土産なるものが如何なるものを指すのか言われずとも察したらしい。得心がいつたと頷いた。

「けどさあ、この際言わせてもらつけど、其れだつて無駄なことじゃなかつたと思つてるんだぜ俺としては。感傷だけじゃなくつてな」

すつかり任侠にしてやられ、意図されるがまま、過去に於ける自らの行いを現在の情人である書生の前でべらべらと喋つてしまつたことが気に食わなかつた。以前關係を持つ際に怒りで身を震わせながら述べたように、過去のことで見くじらを立てる気にはなれぬらしく、此の話を聞いても平然と佇み続ける其の姿に安堵はした。しかし何も目的もなく、ただ冷やかしと感傷の為だけにあの魔窟へ通つような軟弱者と見られては名譽に関わる。

「そんな時知り合つた妓たちが、今じゃ玉の井辺りで遣り手やつてんだ」

十二階下追い出されて、本郷界隈や其処いらのカフェーに潜んだ連中がどうなつたかは流石に知らねエけど、彼処の連中は今でもなかなかのツテを持つてるからな。今でも色々と助かつてるんだぜと、

弁解まがいの科白を吐いた。

「苦しい言い訳やのオ鳴海イ、」

「うるせエ。嘘じゃねエよ、本当のことなんだからな。……本当なんだぞ」

任侠へ向かつては胸を張るも矢張り自らの情人の前では其の勢いも委まざるを得ないのか。恥すべきところは無いと重ねて言つ割には書生へと向ける目線が泳ぎ気味だった。

元より乱れた価値観を持つ男であつたが、軍を去り、【鳴海】という一介の探偵となつてからは尚のこと、来る者は拒まず去る者は追わずといった風体に拍車がかかつた生活を送っていた訳だが、よくもまあこれほど変わるものだと、戦々恐々とした面持ちでツレの怪気を恐れている様を見て遠慮なしに笑つてやれば流石に不快だったのか。伊達男は頬を膨らましてなんだよ、と絡んできた。

「エエ見世物や思つてな、」

「見世物だと、」

「そや、」

今までやりたい放題に遊んできたんや。

「其の分のツケが今になつて巡つて来よつたんやろが。ホンマ神様はうまいことやりよるのオ、」

「畜生……、今すぐお前を殴りてえ……」

そう言つて益々愉快そつに笑つ任侠を憎たらしく思つものの、しかし自らの悪行の殆どを知つてしまつている此の男を前にしては汗鬨な行動は出来ない。無論、何らかに支障あると思われる情報の種類など洩らしたことは一切無いが、其れに抵触せぬと判断したことは喋り倒してしまつた自覚はあつた

ので、次は何をすつば抜かれるかと怯えるしかなかった。

だつて仕方が無いじゃないか。

半ば開き直り気味に思つ。

つい最近まで、何処へ通おうと、誰と寝ようと。そんなことは一切気にしなかつたし、誰かから其れを指摘されたところでそんなものは痛くも痒くも無かつた。寧ろ失笑や冷笑で以つて報いてやることこそが、自らに相応しいものであつたのだ。そりやあ確かに今にして思えばろくでもないことばかりやつてきたけれども。何もそんな風に言わなくなつたつていいじゃないか。

過去を思い出しへこたれ気味になつた伊達男が、黒猫の背を撫でながら沈んでいるのを察した書生は苦笑し、俺は気にしませんからと軽やかに言い放つた。其の言葉を聞いた伊達男の気分が僅かばかり浮上したのを察し、葛葉が甘い男で良かったのオ鳴海イ、と任侠が銚子を差し出してやると、座敷に通されてから此の方、任侠に苛められ続けていた伊達男はすつかりと拗ねた顔で、しかし確り盃を差し出しながら、ふんと鼻を鳴らした。

そうして卓の上の小料理類が片付いた場合に書生の背後の襖から声がかかり、任侠が応えを返すと其れがすつと引かれ、失礼しますとの声と共に店の者が数名、鍋や新しい銚子の類を持って入つてきた。空いた小皿や銚子を片付け、予め火を通していたのだらう、中央に設えられている炭鉢の上に鍋を置き一礼した後に素早く去つて行つた。

それにしてもあれやな。

煮えた鍋から合鴨の肉片や葱、豆腐を掬い取りながら任侠は感慨深そうに口を開いた。

「あれだけけしかけといて何やけど。正直お前が十五も歳下の男相手に受身に回ってやるほど、殊勝な奴やとは思わんかったわ」

ふ、と笑い、意地でも反心を返すものかと頑なに箸を動かす伊達男を見詰めた後、書生へ向かつてゆるりと視線を投げかけた。

「で、どないやねん葛葉ア」

「は、あつしは」

突如質問をぶつけられ、律儀に箸を置いた書生は戸惑ったように任侠を見返した。

「お前ら見とつたらどつちがどつちやゆつしは、自然判るんやが……」

居心地の悪そうな伊達男を他所に何時になく大人な会話を繰り広げている任侠と書生は、卓を挟んで差し向かいに座したまま、互いに盃を重ねながら続ける。

「俺に答えられることでしたら」

気安く承諾しながらも言外に答えられぬこともある、と伝えてくる書生へ向けて、ほな遠慮なくと前置きして任侠は口を開いた。

「もしいつが『やらせてくれ』言つてきたら、お前どないするんや」

間髪入れずに伊達男が酒を吹いた。

ざりざりの所で身を翻したお陰で危つく難を逃れた黒猫は尾を膨らまし、伊達男へ向けてシャーッ

と一喝するが、当人はそれどころではない。添えられたお絞りで口元を押さえ苦しそつに噓せ返りながら辛うじてお前何を、といった趣旨の言葉を捻り出した。

「何をて、分かんかったか。何回でも言つたるで、」

「いや、いい、いい。もう言つな。だが其れにしたつてお前、」

「確り収まつて仕舞とるんは判つとるけどな、そら不思議に思つて当然やと思わんか、」

お前かて男や。しかも十以上も歳が上やのに。

「突つ込まれるよりは突つ込む方が、そら工工んと違つんか。経験無い訳やないんやろ、」

普段なら一笑して躲すところであるが、書生と黒猫の居る最中とあつてはどつにもこつにも返答致しかね。こいつは酔つているのだから否酔つていてくれ頼むからと一心に願ひながら確認した。

「ちよつと待て佐竹。酔つてんのかお前、」

「何言つとるねん、んな訳ないやろこれしきの酒で、」

「いやもう本当酔つてて下さい健三さんお願いだから、」

素で惚けとるお前と同じにするな、と鼻であしらわれるが、先程とは違い内容が内容なだけに此処は遠く訳にいかないと食い下がる。

此の書生ときたら只でさえ通常感覚とは乖離したところに存在しているというのに、そんな話題を下手に持ち出されては堪らない。解決するまで延々付き合はされる羽目になるのは自分なのだ。

「いやいやいやいや、おかしいだろつ。そもそもお前は今日慰勞の為に此の二席を設けたんじゃ無かつたのか其れとも其れはただの建前で俺たちの間に波風を立てるために呼んだのかどつちだ、」

「随分な言いがかりやの。そんなつもりは毛頭ないで」

「嘘つけ」

切羽詰った口調で魂胆を問い質してくる伊達男を面白そうに眺め、そやかてと続けた。

「軍抜けてから此の方、男なんて見向きもせんと、女ばかりとうかえひつかえ、エライ活躍ぶりやつたお前が、何で突つ込まれる立場に甘んじていられるんか不思議に思つても仕方ないと思わんか」

「ちよつ、なん」

「何でも何も」

自らの情人の前では流石に調子が狂うのか、頭が巧く回転してない伊達男の姿は実に愉快の一言に尽きた。

「……お前しよつちゆう深川の宿利用しとつたやないか」

「なんや、つい最近までわしの持ち宿もエライ鼻窟にしてもろとつたみたいで」

「それまであんまり来んかったのに、何でか突然足運んでくるようになって。あの騒動が起ころるまでの数ヶ月はよオ顔見せてくれとつたのに、最近では全然らしいのオ」

あの騒動が起ころるまでの数ヶ月、とくれば其れは既に書生が探偵社で寝起きを始めていた頃合を指し、脂汗が浮かんでゐる伊達男の顔を、書生は無言で見詰め、あらかたの事情を全て察している黒猫は素知らぬ顔で卓上に横たわり、尾を揺らめかせて其の場を睥睨していた。

「何があつたんかまでは聞いてやらんけどな、偶には顔見せたれや。寂しがつとつたで」

固まつたまま沈黙を続ける伊達男の姿を見詰めた後、書生は任侠へと向き直つた。

「自分には生憎と未だそういつた経験はありませんが。……彼が望むのであれば、そうしてもいいと思つています」

潔い返答に、任侠は笑つて目を細めた。

「時にお伺いしますが。……先程仰られた持ち宿という処は、男女でしか泊まれぬものなのでしょうか、」

書生からの質問に一瞬目を見開いた任侠は、直く様子を浮かべ、いいや、と答えた。

「後で場所も教えといたるわ。話も通しとくから、好きなように利用せえ。猫も言つたら預かつてくれるしな、」

「有難うございます、」

書生は頭を下げ、改めて視線を向けた先では矛先を向けられたことを悟つた伊達勇が、先程まで垂らしていた汗を遣つものへと変化させ、喘ぐように問いかけた。

「……お前、何考えてんだ、」

「何がです、」

「何つて……お前ネコになるつてのがどついつことか分かつてんのかよ、」

下手したら男としての存在意義を喪失しちまうくらいに衝撃があるんだぞ。身体は勿論心にもだ。年端のいかぬ子供を相手に言い聞かせるよつな口調で説明する。

「幸い……ついたらおかしいかもしれねエけど、俺は元から、そういつたことには大して頓着しない性質だったからそれなりに耐えられたけど。でも、お前は違つたろう、」

「しかし」

膝を進め、書生は食い下がった。

「けれど俺は、本当に構わないんですよ。相手が貴方なら」

「分かった、分かつてる。疑っている訳じゃないから。……嗚呼もつ本当に勘弁してくださいライドウさん後生だから」

「……何故其れ程までに拒否なさるのです」

佐竹さんが仰っていたように、俺の方が貴方より十五も年下です。

「容貌だつて……不本意ながら、黙つて立つていれば貴方よりもなよなよしい」
なのに、何故。

退く気配のない書生を前に正座したまま、伊達男はああ、うつと返答に窮した。
ちよつと涙が出そうになった。

「やつぱり駄目。駄目です。俺はそんなことお前にはしません」

書生の心を無にしないように改めて其の状況を想定してみるが、部外者の居る此の場ではどうにも自らの想像力に限界を感じてしまい、首を振ることで答えた。

「駄目よ駄目駄目、駄目なのよ……ってか。お前今日は其ればっかりやの」

「其処の元凶、黙つてろ」

面白そうに節をつけて擲擧う任侠を伊達男はぎろりと睨み付ける。一方、拒絶された形となった書生は肩を落とし、落ち込み気味に呟いた。

「……矢張り、俺では反応しないということなのでしょうか」

「はつ、違エよ」

反射的に否定すれば、思い当たる節でもあつたか。書生はそうですよと納得顔で頷き。身に覚えがある伊達勇は、任侠の前ということもあつて少々赤くなつて目を彷徨させた。

「……タチの経験もある言つてたで」

「黙れつて。いいからお前は口出しするな」

また余計な横槍を入れてくる任侠へ向かつて目尻を赤くしたまま牙を剥くが、当の本人はおお怖、と呟いてにやにや笑つだけ。嗚呼もつ俺つてばどつしてそんなことまでべらべら喋つちやつたんだろつと過去の自分を嘆くが、全て後の祭りである。

先の一件の折だけでなく其の前から、やきもきさせられることはしょっちゅうで。書生とくつついて安定したかと思つたら、うじうじと青臭い愚痴を聞かされた拳句、男同士のあれやこれやに關する詳しい知識まで無理やり植えつけられたのは記憶に新しい。そんな外れ籤ばかり引かされた任侠からすれば、所詮此の程度。本当にどつてことのない仕返し程度の認識しか持ち得なかつたので、助け舟を出してやる気には到底なれなかつた。

「……一体どなた」

彼が異性のみならず同性からもそついった目で見られがちである、ということは、何ら不思議なことではないと思つている。何せ此の自分でさえ、身に覚えがあるのだ。現役時代、其れを武器としていた当時の彼ならば、そりゃアもてたことだろう。しかしこれまで見聞きしたことはあくまでも【受

身』としての経験であつて。先程任侠が証言したように現役を退いてからというもの、専ら女性ばかりを相手にしていた彼は、『男が好き』という性分である訳ではない筈だつた。其の彼が、『抱く』氣になれた相手とは。

本當の意味で情を交わした初めての相手は自分であるという矜持はあるものの、彼が受身ではなく抱く立場になつたことがあると聞かされれば、矢張り氣になるのが人情というもので、無論彼を責める氣は毛頭ないことを示しながら問いかけた。

俯き、忙しく顔色を変えていた伊達男は逃げ切れないことを悟つたか。立て続けに盃を空け、酒の勢いを借りて白状した。

「幼年に行つてた時の、後輩」

ぶつきらばつに告げた後、書生と任侠をじろりと見遣つた。

「あ、もう。……今更だしな、何だつて話してやるよ」
手酌で酒を注ぎながら、伊達男は昔語りを始めた。

「陸士はな。まあ一応学校だし、通つには金が要つたんだ。だけど、例外はある。父親が戦死した子供だつたら、タダで通えたんだ」

俺もそのクチだ。

好物の合鴨をつつきながら、さり氣無く告げた。

「両親共に健在だつた時には金も親戚もそれなりにあつたみてエだが。親父が死んだらあつという

間に金は無くなつたし、金が無くなつたら沢山居た筈の親戚も蜘蛛の子散らすみてえに居なくなつた箱入りだつた割には根性入つてたお袋も、頑張つてはくれたんだけど。

「やっぱり慣れない苦労は堪えたんだろうな。身体壊して、死んじまつた」

まあ此のご時勢じゃ、珍しい話でもない。

笑みすら浮かべて、素つ氣無い口調で語つた。

「けどまあ幸い、つていうか、俺が幼年学校に入れる歳になるまで踏ん張つてくれてさ。其の点では大した女だつたと今でも思つてるよ、俺のお袋さんは」

当時、陸軍の中学として、東京に居を構える中央幼年学校を代表に、名古屋や大阪にも地方幼年学校が存在していた。東京出身の自分は無論中央の方へと在籍することとなつたのだが。

「 彼処の習慣を知つた時には、流石に驚いたね」

何ともいえない微笑を浮かべ、彼は酒を飲んだ。

「死んだお袋は何も知らなかつたんだろうな。親父は、……多分知つてたんだろつけど、当然話す訳が無いし。まあどつちにしる他にいくところのない孤兒の俺には受け入れるしかなかつた訳で」

しかし、そついつた裏事情を何も知らなかつた母ではあるが、其の着眼点は間違つていなかった。

長じる内に解つてきたことだが、陸軍内では文部省傘下にある中学の自由教育を受けてきた人材は信用ならぬとする風潮が存在し。また出世に於いても陸大を卒業したか否かより、幼年学校出身者か否かが、実質的及び形式的にも重要視されていたのだ。従つて、陸大ではなく専門の訓練所に通つた自分が彼処まで出世できたのは、ひとり残すことになる息子を幼年学校へ入れると決心した母のお陰で

あるとも言えた。任務で立てた勲功だけで彼処まで身を立てるのは、恐らく無理だつただろつ。

そういつた思ひは胸の中に仕舞いこみ、口では別のことを話す。

「俺は、お前も知つてる通り、昔つからこんな性分だから。割合あつさり馴染めたんだけど……中にはそうじゃない連中も居てる」

その頃のことを思い出し、伊達男は苦笑した。

「見回り当番の時に出くわした、明かりの消えた真つ暗闇の便所の片隅で泣いてたそいつも、馴染めなかつた一人だつた」

見回り点検時の規則に則り、一切の明かりの消された廊下を進み、じめじめした集合便所へ足を踏み入れ、其処で何らかの気配と微かにすすり泣く声を感じ取りながらも一戸一戸入念に調べて。そうして最後に残つた一戸へ向けて懐中電灯の光を差し向けた先に居たのは、入学したての、新入生。

親の名を呼び、密やかにべそをかいていた其の姿を見つけた時の虚脱感は、今でも覚えている。

巷を騒がす非現実的な心霊現象なぞ何するものぞと、端から小莫迦にしていた当時の自分は、其れでも矢張り其の状況には緊張と何らかの期待をしていたらしく。相対してみても正しく枯れ尾花な正体に脱力している自分を他所に、突然眩い光に照らされて驚いたのか。少年は涙で顔を濡らしながら硬直していた。泣く子供相手に怒鳴り散らす趣味はない。我が身を襲つた脱力感も手伝つて無言で眺めていると、叱咤の言葉が一向に下されない其の雰囲気は何を思つたか。少年は更に泣き出し始めた。

一方自分は、べえべえ泣き続ける少年を困惑した面持ちで眺めながら立ち続けていたわけだが、亡

くした父母を呼び続ける其の声に、無性に苛立つてきてもいた。

あ、と思つた時には、自分の右手は、低く、鋭く。相手の頬を打っていた。

「お前にしては感情的やの」

「だって俺もそんな時や未だ十五になるかならないかだったし」

打たれた衝撃で見張つた両眼から再び涙が潤んでくるのを見て、微かな声で叱咤した。泣くな。

泣いたら親が帰ってくると思つのか。誰かが助けてくれると思つのか。巫山戯るな。両親が死んだのはお前だけじゃないんだ。此処じゃ同情すらしてもらえない。若しお前に少しでも男としての矜持があるのなら、泣くんじやない。泣くくらいなら

「 笑え」

そう言つて少年と見詰め合つた後、踵を返し、背に突き刺さる視線を感じながら其の場を後にした。

それから暫くは何かと面倒な履修が続き。その他諸々のことでも目を回す忙しさを味わっている内に其のことも忘れ、再び見回り当番が回つてきた。欠伸を噛み殺しつつ何時ものように電灯片手に見回りを続けていたら、 そいつは、居た。

「ご丁寧に不出会つた便所に身を隠し、自分が支配を察して歩を止めた瞬間、そつと姿を現したのだ。

自分を殴つた上級生が誰だったのか、調べ上げるのは実に容易かつただろう。一学年に五十人。当番と言つからには順繰りに周つてきていたんだし、何より自分は、それなりに顔が知られていた。

「何でかは訊くなよ。ああいうのは早めに唾つけられるモンなんだから」

電灯の光に晒された、涙を浮かべていない其の面は、嗚呼こいつもじきにと思わせるには充分で。

誰も彼もが自分のよつに割り切れるわけではないと知っていた自分は、そのことに少々同情した。

黙つて凝視する自分に向かつて頭を下げた少年は、所属する級と氏名をほそりと告げた後逃げるよつに立ち去り。一方的な接触に訳が解らず首を捻るも、考えたところで明瞭な結論が出せる筈も無く。一刻も早く寢床にありつく為に自分は再び定められた順路に戻った。

「密告らなかつたことに礼を言いに来たんだらうなつて思つてたわけよ。その時は未だ」
ところが其の予想は、外れた。

自分が見回りをする度に、少年は其処に身を潜めていて。

幾度か顔を合わせた折に、選りにも選つて逢引場所に使所を選び続けることは無いだらうと、呆れて下世話な戯言を飛ばしたのも自分が先だつた。

「男同士で、あ、逢引も何も無いと思います」

初めて自分から反論する言葉を発して赤くなる少年の顔を、面白そうに眺め。未だ未だ子供だな、と僅か一つばかりしか違わないのに随分と年寄り臭いことを感じながら、此処では目立つと笑つて奥へと導き。其れまでよりは打ち解けた会話を少々交わし、其の日は其れでお開きだつた。

其れからは流石に緊張も解けたのが、寛いだ表情を晒すよつになつた少年とは学内で出くわしたりした折にも、一、三の言葉を交わすよつになつた。無論、色々と障りがあるので、人前では特別な親しみを示すよつな言動は一切取らなかつたし取らせなかつたが、其れでも懐いてくれていることは察することが出来たし、正直悪い気分しやなかつた。

最初は、悔しくつて腹が立つて、眠れませんでした。

ある時、少年は自分を前にそう呟いた。

以前擲掬われたことで自覚したのか、それ以来便所で会うことは殆ど無かった。宿舎や用具室の裏、人気の無い一室など巧いこと見つけては其処を指定してきた少年の隠れた有能さに、感心すらした。

しかし何時までたつても自分の発する『逢引』と言つ言葉に反応して赤くなる姿は非常に幼く、決して悪くは無い頭の回転や自端の利き方といった能力との不釣り合い加減が、妙におかしかった。

どうやら出会つた夜での自分の言動を指しているらしい其の告白に、無理も無い、と苦笑した。

「でも翌日、教官から何の音沙汰も無かつたことに驚きました。報告、なさらなかつたんですね」
「あ、……面倒だつたからな」

そう言つてだるそうに耳の後ろを掻く自分を、少年は笑みを浮かべて見遣つた。

それから暫くして、風の噂で、先輩もまた御両親を亡くされて自分と同じく孤独の身であられたことを知り、ひとり、不幸の蜜に酔いしれていた自分を恥じました。

そしてあの晩の一礼に繋がつたという訳らしい。そう言つた少年の姿に得心がいった。

言うに言えず、ずっと気に病んでいたのだろう。肩の荷が下りたと安堵して微笑む少年へ手を伸ばし、気にするなどの意味を込めて自分と同じ坊主に刈られた頭を撫でてやつた。

「もう、過去を偲んで子供のように泣くような真似は致しません。其れはまた、自分の、亡き両親が望んでいることでもあると思います。有難つ御座いました」

面と向かつて礼を言われることに慣れていなくなつた当時の自分はすっかり照れてしまい。彼方の方へ顔を背け、珍しく頬を染めた上級生の顔を、少年は小さく声を立てて笑つた。

「何や、話聞いてると葛葉に似てるのオ」

「え、そつかな」

「顔だの何だのは知らんがな。…お前、昔からそついつのには弱いんやな」

「煩いなあ…。しょうがねエだろ、可愛かったんだから」

子犬みたいで。

「…それはつまり俺も子犬のように」

まあそんなこんなで仲良くしててね。

「話逸らしましたね」

しかしそんな長閑な日々も、そつは続かなかつた。

自分も予測していた通り、とある方面から少年の下に手が回つたのだ。

勿論既にそれなりの噂を見聞きしていたのだから少年は、其れでも矢張り自らが対象となるとあつては衝撃を受けたらしく、酷く思い詰めた面持ちで自分に連絡を取つてきた。

自分には何もしてやれないし、するつもりも無かつたのだが、愚痴くらいは聞いてやってもいいかと気紛れを起こし、時間を待つて、指定の場所へと向かえば、朗らかだった其の顔を強張らせた少年が、自分を待ち構えていた。

ふらふらと其処に現れた自分と目が合つた瞬間、駆け寄つてきた少年は

「何故 男同士でこんな　そもそも、あれほどの階級の方なら、態々男を相手にしなくとも、妾を囲つことだつて容易いのではないのですか、」

「そう言つて嫌悪に身体を震わせた。」

其の幼い姿を、青いなあ子供たなあ可哀相になあと思ひながら、慰めにもならない言葉を口にした。

「悪癖つてのは中々直らねエモンだからな。早々に諦めて、巧いこと利用しろ。其の方が利口だ」
「そう言つて笑つ自分を悔しそつに見ていた少年は暫し俯いた。」

あ、またこいつ泣くのかな、と思ひ、静かに様子を窺つていた自分を彼はきつと見据え、潤みがちだつた其の双眸に、ある決意と熱情を込めて、言葉を放つた。

「あんな人に身を任さねばならないのは屈辱です。しかしどうしても避けられないといつのであれば、せめて、せめて初めての相手は　貴方がいい」

「そう言われて、やつたんか」

「……ああ。まあ、目をつけられるだけあつて、器量も中々良かったし、そいつのことは嫌いじゃなかつたしな。何より俺自身、　自分が男相手にできるのかどうか、試してみたかつた」

其れまでは専ら受身ばかりだつたからなあ。

「でもまあ、下手ではなかつたと思つよ。初めてにしてはね。俺も、未だ青臭い身体してたから、少なくとも、いきなり成年男子を相手にするよりやアましたつただらうよ。」

「その後、件の彼とはどうなつたんです、」

「あめ」

どうもこうもないな。当初の予定通り、あいつはお偉いさんの手持ちになった。漬物をつまみながら伊達男は何でもないことのように呟いた。

「其の時肌を合わせたのは其れ一度つきり。誰にも言わない、悟らせないって誓わせた通り、陸士で会つても、決して特別な何かを匂わせるような素振りは見せなかつた。此の俺からみてもな」
実際、大した男だよあいつは。便所で泣いてた姿からは想像も出来ねえほどにな。

「結局俺は、途中から特別課目受けるようになって、課目の違つあいつとも出くわさなくなつた」
「それつきり、」

「陸士じゃな。次に会つたのは、それからもう何年か経つて、任務に就いてた頃だ」

某日、受けていた任務を漸く終えて、人気の無い夜道をそそくさと帰宅していた折、背後から誰何の声を上げられた。偉そうな其の口振りから、同じ軍に所属する者が血気盛んな官警辺りだろうと思ひ、溜息をつきながら疲れた身体で振り返つてみれば、

「一人前に成長したそいつが、それなりの階級章のついた軍服着て立つてたんだ」

最後に会つてから優に数年の月日が流れていた訳だが、加齢による人相の変化などの特別な知識のあつた自分には、一目でそうと知れた。しかし彼にとっては違つた。当時から変わらぬ、否それ以上に目端が利くようになっていた彼の目に、さり気無くも隙のない自分の姿は、さぞや拳動不審に写つたことだろう。

確かに大成するかもしれないと思つていたが、それにしても随分と出世したモンだなあと呑気に

考えながら、敵しい目で自分を見詰めてくる其の懐かしい、しかし済ましきつた顔が妙におかしく感じられ。つい笑みを浮かべてしまった自分に眉を曇め、彼は近付いてきた。しかし間近に接しても自分が誰であるのか、さっぱり判っていないようだった。其れも無理は無い。自分の容貌は、彼の知る当時の其れとは全く異なっていたし、髪も服装も、髻鬚とさせるようなものでも無かつたのだ。

「それで、どうしたんや」

どうしたかつて、そりや簡単さ。

にやりと笑いながら伊達男は答えた。

「まだ辛い時には便所行つて泣いてんのか、つて訊いたら一瞬戸惑つた顔したんだけど、漸く判つたんだろつな。ちよいとばかり固まつて、済ましてた顔真つ赤にして睨みつけてきやがったよ」

あはは、と声を出して上機嫌に笑い、盃を空けた。

其れからは別に大して珍しい展開にはならなかつた。すつかり動転した面持ちの彼を引き摺り、値の張る料亭へと連れて行き。奢れと言つて散々絡んでやつた。為されるがままの彼はといえは、成人して後初めて目通りした自分相手に如何なる態度を取るべきか判断に迷つてしまつたらしく、落着き欠片もない挙措を見せながら、それでもお開きの頃には喜びが驚きや困惑に勝つたのだろう。ほんの僅かに頬を染めてはにかんでくる其の顔は、造作自体は立派な大人の其れに変わつてしまつていたものの、間違ひなく当時の少年と同じものであつた。

「……で、其の後は」

「さあね。あいつももういい歳した男だつたし、焼けぼっくに火が点くよつな事は余程のこ

とがない限り早々起こりえないさ。俺は兎も角、向こうは世間様に恥し入らないだけのものを持つて
いるわけだから。言及してくれるなよ。」

「お優しいことで」

「ふん……ただ」

既に自分たちの間には他に言えない秘密が沢山あつたから、今更もつひとつばかり増えたところで
構わないでも思つたんだらう。何度が隠れて会うつうちに彼は酔いに任せてぼろりと口を滑らせた。

「……あの頃、俺に向かつて莫迦みてエに『男同士、男同士』つて言つてたけど、それは半分以上、
自分に言い聞かせてた言葉だつたんだ、つてな」

「それは」

「笑つて流してやつたよ。何となく勘付いてたことだったし、今更掘り返すことでもないだろ」

其処から先はあれだ、そいつとは偶に隠れて会つて飲む程度。俺のやつてることに関わらせる気は
毛頭ないよ。今も昔も、これからもな。

「何せ、綺麗な嫁さんもちつて幸せにしてるみたいだし、俺にもそんな知り合いが一人くらい居て
もいいかなつて思うしね」

そう言つて、先程からびこびここと其処だけ動いている黒猫の尾の先に触れながら小首を傾げた。

「それにしても、何であいつは俺のことなんて好きになつたんだらう。其れだけが未だに解らん」
やつぱり男しか居ない環境だとどんなに真つ当な感覚持つてる奴でも狂つちまつものなのかねエ。

其れを聞いた書生は徐に銚子を取り上げ、伊達男の盃に注ぎ入れながら呟いた。

「しかし、絶るべきよすがもなく、心細さに泣いていた折にそのように優しく接されては、心動かされてしまつのも無理なかつたことかと存じ上げますが」

「え、何処が優しいのよ。俺ってばいきなり身勝手な科白吐いて殴つたんだよ、そいつのこと、心底驚いたのか。目をばちばちと瞬かせながら問いかけた伊達男の、何処かしらすれた感覚に、お前昔つからそんなかと任侠は呆れ、書生は苦笑した。

「少なくとも俺なら、少しずつでしようけれど、……矢張り貴方に懐いていたと思います」
丁度、その『彼』のようじ。

「あ、まあその、……くそ、そついや昔つから俺はお前らみたいなのが鬼門なんだよな」
穏やかに微笑みながら書生に断言され、どつにも気恥すかしくなつたのか。伊達男は其のもじやもじやの頭を掻きまわしながら毒づいた。

「しかし、ならば尚更、どうして俺が相手では駄目なのかが気になります」

「……しつこいねお前も。そんなにやられる立場になりたいの、」
キツいんだぜ、あれ。呆れた目を寄越す伊達男に怯まず書生は見詰め返した。

「そついう訳ではありませんが、……納得がいかがぬ俺の心情も察していただきたい」

「ああもつ、……だつてしょうがねエじゃねえか。お前つてば形振り構わず、ものすこい勢いで俺のこと絡み取つちまつんだもの」

あんな状況に身を置かれ続けちゃア、早々自分を抱く立場として想定できるモンじゃねエぞ。

「しかもお前、男としての矜持が矢鱈と高い。確かに俺だって男なんだから突つ込む方が好きだが、そんな子にネコやらせる程、サドっ気は持っていない。何より、……」

「何より、何です。仰ってください」

しまった、と珍しく顔を曇める伊達男に書生は詰め寄った。しかし伊達男は頑なに頭を振り、口にするのを拒み続ける。

「……すまん。此処から先は勘弁してくれ。聞きたければ後で話してやるから」

「しかし」

ニヤ。(いい加減にせんか、ライドウ。これしきの酒量で酔つたわけでもあるまい)

書生が答えを手にするまで、延々繰り返されそうな問答の気配に痺れを切らした黒猫が遂に口を挟んだ。書生が伊達男に関したことで気に病み続けるのは左程珍しいことではないが、此の場の其れに至つては内容が内容だ。居住を共にして久しい黒猫には役割分担のことなど既に知つて久しいが、それでも食事を目の前にしてこつても延々と深い話をされては堪らなかつた。しかも何だか生々しい。

ニヤ。(全く、ケツの青いひよっこめ。不服があるなら後で当事者だけで話せ)

不服そうな面持ちで、しかし其れでも尤もな意見に書生は口を噤み。僅か二言で書生を黙らせた黒猫は、あからさまに安堵している伊達男をちらりと見据えた後、別にお前の為だけに口を挟んだ訳ではないのだがと思ひながら無言で空の深皿をつつき、催促した。

「失礼しました」

不満は残るものの、下世話な話題を口にし続けてしまった自覚はあつたか。書生は控えめに頭を下

げた。伊達男は功勞者である黒猫の皿に酒を注ぎ、鍋で煮えた合鴨の肉片や白菜を掬い取つてやつては息を吹きかけ、冷ましたものを順次黒猫の器に盛つてやつていた。其の甲斐甲斐しい尽くし様を書生が悔しそつに見ているのに、伊達男は果たして氣付いているのだろうか。

恐らく氣付いてはいまい。

こつこつ妙なところで鈍い氣質は何があつたつて変わるものではないらしい。別段自分が巻き込まれる訳ではないので、任侠は忠告もしてやらなかつた。しかし時折相手によつて嫉妬深い氣質を覗かせる書生であることを知つてはいたが、まさか其の対象が自分だけではなく常に行動を共にしている黒猫にも向けられていたとは。

半ば呆れの混じつた驚きを感じるが、よくよく考えてみれば自分も、此の様子ではおそらく黒猫も、伊達男から頼りにされているといふ点では言致している。どれだけ頑張つたところで未だ稚いところのある書生には、其れが羨ましくつて仕方がないのだから。

暫く睨みつけた後、何時ものことと氣を取り直したが、黒猫の世話に夢中になるあまり、自らの食事が疎かになつてゐる伊達男の器に、溜息をつきながら手馴れた仕草で鍋から肉や野菜を取り分けてやつてゐる書生の姿を眺め、黒猫と書生に挟まれて穏やかに笑つてゐる伊達男の、すつかり落ち着いて幸せそつに笑つてゐる様を見て、任侠は靜かに笑みを浮かべて盃を傾けた。

【後日、某所にて】

「求められてゐることを実感できる方が好きなんだ。欲しいつて氣持ちが無い訳じゃないが」

「……そうだったんですか。それならそれで」

「言えばよかったのに、か。は、ん、……冗談じゃねえ。佐竹の前でそんなことを白状した日にゃア、後でどんな擲掬われ方するか分かったモンじゃねえからな」

あーでも

「何です、」

「ゴウトにはバレバレだと思っ」

「否定したいところですが、できないのが悔しいところです」

「敵わないよなあ。……また一緒に寝てもらおう、って、痛エツ」

「情人たる俺を前にして、他の男との同衾を口走る人がありますか。あれは猫の姿をしていても、
「あーもう、判ってるってば。なんだってお前はあんなかわいい黒猫をそんな目で見るのかねえ」
俺にとってはかわいい黒猫というだけじゃ済まないからに決まってるでしょう。」

「はいはい。……ま、全ては今後の流れ次第ってことでよろしくー」

(あいつと寝ると何か安心できるんだよな お前とは違つた感じで)

〔注〕

・タタキヤツツ コミ……強盗や強姦

・鳴海は一八九八年生まれ。一九二二―二三年に十四歳。即ち一八九七年から一九一八年まで存在し

ていた陸軍中央幼年学校に在籍したものと推測設定。出身者による陸軍将校に占める割合は三分の一。学費は陸海軍の士官子息は半額、戦死者遺児は免除。世間的認知は「陸軍の中学校」。